様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７５０２８２

研究課題名（和文）体育学の全体像および独自性の解明

研究課題名（英文）A research on the whole structure and originality of taiiku-gaku

研究代表者
林　洋輔（Hayashi, Yosuke）

国士舘大学・体育学部・研究員

研究者番号：６０６４５５５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　500,000円

研究成果の概要（和文）：　フランスの哲学者・数学者ルネ・デカルトにおける「学問の樹」の構想を用いて体育学を一本の樹木になぞらえることにより、「体育学の全体像」について次の結論が得られた。体育学の「第一の研究対象」として「人間」、そして「第二の研究対象」として「身体運動」が定められ、両者をふまえた「身体運動する人間」が体育学における研究対象の根幹である。さらに、幹から伸びる「枝」に相当するものが体育学に属する諸専門領域であり、枝の先に実る「果実」が研究成果に相当する。他方、体育学の独自性としては「人間の身体運動の最高度の可能性を構想し、その実現を試みる学問」として同じ人間を研究対象とする医学との違いが明確化された。

研究成果の概要（英文）：In the history of discussion to clarify the whole structure and originality of taiiku-gaku, three essential characteristics become evident: (1) Science should be aimed at being practical and useful, (2) it should contribute to our well-being, and (3) it should aid the search for wisdom..In conclusion, the whole structure of taiiku-gaku could be understood as being analogous to a tree, and the originality does not depend on humans themselves or human movement as a fundamental research object. The originality can be analogized with the achievement of Generosity, which is the goal of the “tree of sciences”. Thus, on the basis of output diversity analogous to fruit taken from branches of the tree, the originality can be characterized as a science that tries to achieve the highest performance of human movement imaginable. More enlightened discussion can ensue by reconsidering the concept of taiiku (which is different from Physical Education) and the identity of Taiiku-gaku researchers.

研究分野：体育・スポーツ哲学

キーワード：学問の樹　知恵の探求　他者への貢献　実際的学問　身体運動する人間　最高度の可能性　体育学者　「体育」概念の再考

１．研究開始当初の背景

（１）学問分野としての体育学は会員数が6000 人前後で近年推移するわが国でも有数の巨大学会である。そしてこの学会に属する研究者が研究の対象として定めるものは単に「体育」のみならず「スポーツ」や「身体運動」、さらには「介護福祉・健康づくり」あるいは「アダプテッド・スポーツ科学（障がい者スポーツ研究）」など、およそ人間の身体活動のすべてを範囲におさめており、学術研究の国内学会として社会に有為な貢献を果たし続けている。

（２）他方、学術団体としての確固たる社会的な位置づけとは裏腹に、「体育学」という学問の「全体像」および学問としての「独自性」の掴みづらさがつとに指摘されており、下記に記すように「体育原理」（現「体育哲学」分野）では往昔から議論が続けられている。しかも、学問の全体像および独自性の定まらない現在の状況により、体育学を自らの研究拠点とする諸研究者のアイデンティティ確立を困難なものとしている。

（３）さらに、研究代表者の属する「体育・スポーツ哲学」および「体育原理（体育哲学）」分野において、この「体育学の全体像」および「体育学の学問としての独自性」を問う議論は少なくとも半世紀前、すなわち 1960 年前後から行われてきたことが文献資料を通じて確認できる。そして日本体育学会の発足が 1950 年であることを考えるならば、「体育学の全体像および独自性の解明」という課題は日本体育学会の発展とともに歩みを共にしてきた問いである。言い換えるならば、この研究課題は現在にまで至る未解決課題として関係研究者のあいだで議論することの意義が確認され続けて来たものである。

２．研究の目的

以上に挙げた研究の背景を踏まえ、次の問いに対する回答の提出を本研究の最終目的とする。第一に、体育学の全体像はどのような説明を通じて定められるのか。第二に、第一の問い――「体育学の全体像」の解明――に対する回答を踏まえ、体育学の学問としての独自性はどのようなものとして定められるのか。これら二つの問いに対する回答の提出を本研究の最終目標とした。

３．研究の方法

議論に際しては、哲学分野において伝統的に採用かつ評価されてきた方法論である文献の精読（文献研究）をまず研究遂行の前提とした。次に、発表者のこれまでの研究を踏まえてフランスの哲学者・数学者であるルネ・デカルト（1596-1650）がその著作『哲学原理』で主張した「学問の樹」を手がかりに「体育学の全体像」の解明を試みた。さらに、この「学問の樹」というモデルに即して議論を進めることにより、「全体像」解明に先に見えて来る「体育学の学問としての独自性」の解明を試みた。

４．研究成果

本研究の成果論文の議論に沿いつつ、本研究の議論の結果として得られた成果を以下に詳述する。

<u>（１）体育学を通底する「三つの契機」の指摘</u>

主として「体育原理」（体育哲学）分野における先行研究を検討した結果、体育学は「知恵の探求」と「他者への貢献」、そして「実際的学問」という三つの契機に支えられていることを本研究は指摘した。これらの契機を指摘することは「体育学の全体像」を明らかにするための予備作業として重要な意味を持つものである。というのも、先行研究の総括を通じてこれら三つの契機が指摘されたことは、本研究が先行研究の後を受けて新たな知見を蓄積することの担保となるもの――言うなら、本研究が先行研究を批判的に検討しつつ、新たな知見を蓄積するものであることの保証――だからである。

<u>（２）「体育学の全体像」を解明する理論モデルの探求と決定</u>

これまでの先行研究において、「体育学の全体像」を明らかにする試みは、そのいずれもがいわば「分類付け」のアプローチを採用してきた。本研究の成果論文の言葉を引用するならば、「これまで行われてきた体育原理の研究者による問題解決の試みは、いずれも各研究者の視点に従って体育学に属する諸学が「分類」されるとともに「関係づけ」が行われてきた（中略）。別の視点から言えば，体育原理の研究者たちは体育学に属する学問のそれぞれについて，或る分野と他の分野との親疎の度合いに応じていくつかに区分を設けて分類を行い，その結果を関係づけることで体育学の全体像ならびに独自性を示してきたと言える。」しかし、これらのアプローチが唯一のそれではないことも先行研究では明らかにされている。具体的に言えば、体育学の全体を一本の樹木にたとえ、その根本から枝葉へと一方向に発展していく樹状図によりつつ、ある体系の全体を説明する「原理論的なアプローチ」も先行研究では試みられている。そして先行研究ではすでにこのような試みは行われており、なおかつ研究の完遂すなわち「体育学の全体像および独自性の解明」には至っていない。それゆえ、このような「原理論的なアプローチ」を採用したところで「分類づけ」アプローチと同様に最終的な問題解決には至らないのではないかとする批判への回答に本研究は迫られた。しかしながら、これまでに体育原理分野において行われた「原理論的アプローチ」はその基となったルネ・デカルトの「学問の樹」を

いわば恣意的に加工したものであって、デカルトの論理を精密に追跡することで議論を展開したものとは言えない。つまり、ルネ・デカルトの唱えた「学問の樹」に沿いつつ「体育学の全体像」を考えていくことの意義は失われていないと言えるのである。それゆえ、本研究では先行研究のなかで中途にして途絶えているルネ・デカルトにおける「学問の樹」を問題解決のための手がかりとして「体育学の全体像および独自性の解明」に取り組む道を拓くこととなった。

（3）「学問の樹」を採用することの妥当性とは？

「体育学の全体像および独自性の解明」という本研究の設定した問いに対し、前掲したルネ・デカルトにおける通称「学問の樹」のモデルを採用することが決定された。今回の成果論文においてはまず、彼がどのような意図をもってこの「学問の樹」を構想したのかについて、彼の著作『哲学原理』仏訳序文に記載されている彼の記述に即して解説することから議論を展開した。

デカルトによれば、学問の総体は一本の樹木に譬えることができる。その「根」は形而上学、幹は自然学であって、その幹から延びるもろもろの枝が諸学問に相当するとともにその諸学問としての枝に実る「果実」が研究成果となる。このような彼の主張の背景について言えば、デカルト哲学が神と精神の実質を問う「形而上学」の議論の結果として、自然界を数学および物理学によってくまなく説明する、いわゆる「機械論的な自然観」の誕生を構想していたことが哲学史研究によって確認されている。そして、その機械論的な自然観にもとづいてもろもろの学問が基礎づけられるとともに、デカルトによれば、「機械学」「医学」および「道徳」が主要な学問として指定される。

以上の「学問の樹」の構想がなぜ「体育学の全体像および独自性」の解明に向けたモデルとして採用できるといえるのか。その理由としては、「学問の樹」の構想された意図が本報告の前段にて明記された三つの契機と合致するからである。具体的に言えば、「実際的学問」ならびに「他者への貢献」、そして「知恵の探求」といった三つの契機はデカルトが自らにおいて学問の在り方として措定したものであって、その根拠はいずれも「学問の樹」の構想が表明された同じ『哲学原理』仏訳序文のテキスト中において確認することができる。それゆえ、「体育学の全体像および独自性」を解明するための理論モデルとして、デカルトにおける「学問の樹」の指定されることの妥当性を本研究は確認した。そこで本研究はこのデカルトによるこの議論をいわば基として「体育学の全体像および独自性」の解明に向けて議論を進めることとした。

（4）「身体運動する人間」の極点へ

デカルトにおける「学問の樹」になぞらえて「体育学の全体像および独自性」を解明することにおいて、留意すべきであったことは次のことである。すなわち、「学問の樹」を構想したデカルトの意図を忠実に再現しながら議論を進めていくことである。これを言い直すならば、「学問の樹」という理論モデルを採用するに際し、デカルト自身のあずかり知らない議論や主張の持ち込みを戒める態度が研究者の側に求められる。この論点においてとりわけ注意すべきことは、「学問の樹」がいわゆる「演繹的なアプローチ」を採用していることである。デカルト研究者の間ではこの「演繹的なアプローチ」は「デカルト的順序」とも通称されるものであり、先に現れたものだけからそのあとに続くものが導出されなければならず、その逆は不可能であるとの順序を意味する。もしこの「演繹的なアプローチ」、言うなら「デカルト的順序」の固守された「学問の樹」を理論モデルとして採用するならば、研究において「先に明らかにされたもの」によってのみ「後に続くもの」としての研究成果が明らかにされなければならないことになる。それゆえ本研究においてもこの「デカルト的順序」を順守する必要に迫られる。なぜならそのことがデカルトの意図に即して議論を進めることであって、研究者間において言われる「内在論理」にもとづく議論の運びとなるからである。

本研究は以上の制約をふまえて「体育学の全体像および独自性」の解明へと議論を進めた。まず解明されるべきであったのは、「学問の樹」における「形而上学」に相当する部分が体育学においては何に相当するのか、といった問いであって、この問いに対して本研究は回答しなければならない。ところでデカルトにおいては「神」および「思うもの」としての「自我（わたし）」が形而上学の原理として据えられている。それゆえ彼の議論を忠実になぞり直すのならば、体育学に属するすべての専門領域がよりどころとする「第一の研究対象」を措定しなければならない。言い換えれば、体育学に属するすべての専門領域が「第一の研究対象」とするものを措定しなければならない。むろん、検討されるべき専門領域のなかには「教育」としての体育を必ずしも前提とせずに研究を進める「運動生理学」分野や「スポーツ人類学」分野、さらには「アダプテッド・スポーツ科学」分野および「介護福祉・健康づくり」分野も含まれている。本研究は体育学における「第一の研究対象」として「人間」を定めることで回答とした。というのは、現行の体育学に属する諸分野はすべて「人間」を「第一の研究対象」に据えることから研究活動を行うことを確認したからである。この答えに対して予想される批判としては、「スポーツ用具工学」と

いったスポーツ・シューズおよびスポーツ関連用具の開発を研究対象とする分野は本研究の回答――体育学の「第一の研究対象」が人間であるとの回答――に該当しないのではないかとするものが挙げられる。しかしながら、諸々のスポーツ用品はそれを使用する人間の運動力学（バイオメカニクス）的な理解に基づいて研究が進められる。このことは競技用のバット然り、グローブ然り、シューズ然りである。したがって、スポーツ用具工学もまた、体育学に属する諸学問のうちの一つではあるが、やはり研究に先立つ研究対象として「人間」を前提に置く。以上から本研究は「体育学の全体像」を明らかにするための「第一の研究対象」として「人間」を定めた。

以上に続く体育学の「第二の研究対象」とは何か。デカルトの「学問の樹」に即して言えば、「根」に相当する人間から必然的に「演繹的なアプローチ」として導かれる研究対象を明らかにしなければならない。本研究はこの問いに対する答えとして（人間の）「身体運動」を回答として提出した。というのも、必ずしも「教育」を議論の枠組みとして採用しない上掲の諸分野においてさえ、人間の身体運動の有り様や多様性に着眼することから議論の展開されていることを確認できるからである。見方を変えて言えば、人間の身体運動に対するよりよい説明の仕方をめぐって「機械論的な身体観」あるいは現象学的にとらえた身体といったさまざまな身体観が提唱され議論されていることを確認できる。そこで体育学における「第一の研究対象」として「人間」を定めたことに引き続き、当の人間の「身体運動」が体育学における「第二の研究対象」として定められる。そしてこれらのことから、「人間」と「身体運動」をあわせた「身体運動する人間」が体育学における研究対象の「根幹」として措定されることになる。

以上のように、体育学における研究対象の「根幹」として「身体運動する人間」が定められた。ところでもしデカルトの「学問の樹」に忠実であり続けるのならば、以後の議論も引き続き「学問の樹」の内在論理に即して議論が進行することとなる。ところで、このような「身体運動する人間」はさまざまな学問をつくると同時に、つくられた学問はそれ自体が学問分野としての自らのあり方や制度をめぐって批判の対象となる。より具体的に述べるならば、デカルトは「学問の樹」における幹として定めた自然学の前提となる「機械論的な自然観」に基づいてもろもろの学問が作られるとした。すなわち「自然学」に含まれる原理によってもろもろの学問が成立することを主張している。これらの議論を「体育学の全体像」を明らかにする議論に置き換えてみると、どうなるか。これに関しては先に述べたように、「身体運動する人間」によってさまざまな学問が作られる。体育学には2015年現在で15を超える数の専門領域がそれぞれに「身体運動する人間」を研究対象の根幹として存立している。その専門領域はそのどれもが「身体運動する人間」である研究者によって作られたものである。しかしながら、それぞれの専門領域は自らの有用性および社会的情勢に呼応してあるときは批判を受け、またあるときは新しく誕生する。たとえば一方では「障がい者スポーツ」の発展に伴って「アダプテッド・スポーツ科学」の専門領域が体育学に属する分野として新たに生まれた。また他方では高齢者の福祉充実に貢献する一助をもねらいとする「介護福祉・健康づくり」分野の誕生は体育学の歴史においてそれほど往昔のことではない。つまるところデカルトが「学問の樹」における「枝」をもろもろの学問として定めたように、彼の議論に従いつつ、本研究も「枝」に相当する部分を「体育学に属するもろもろの学問」として定めることとした。具体的に言えば、体育哲学や体育史をはじめとする人文社会系学問、体育社会学や体育経営管理を始めとする社会科学系学問、そして運動生理学およびバイオメカニクスといった自然科学系学問といった体育学に属するそれら諸専門領域のいずれもが「身体運動する人間」によってつくられた学問であると同時に、それらの学問それぞれが「身体運動する人間」によって批判を受け、よりよい制度として改変されることで専門領域としての盛衰を繰り返すからである。

これまでの議論を通じ、体育学の第一の研究対象として「人間」、第二の研究対象として「身体運動」が据えられるとともに、「身体運動する人間」が体育学における研究対象の「根幹」として明るみに出された。さらに、身体運動する人間によってつくられるとともに改変されるものが「枝」に相当する諸学問――体育学に属するもろもろの専門領域――である。そして、残りの「果実」に相当するものは、なるほどデカルトにおける「学問の樹」に本研究の議論を重ね合わせるならば、諸学から生まれる「研究成果」が相当することになる。しかしながら、次のような批判を通じてこの思惑に対しては再考がなされなければならない。すなわち、研究対象が「人間」および「身体運動する人間」、さらには人間によって作られたり批判されたりする諸専門領域という学問の構造は何も体育学に限られるわけではない。たとえば、現代の医学分野においても研究の対象は人間であり、リハビリテーションなどといった治療を通じての「身体運動する人間」であり、さらに医学分野のうちでも分岐したさまざまな細目の研究分野――つまりは諸専門領域――によって学問としての「医学」が存立している。もし本研究がこのまま「学問の樹」における「果実」に相当するものとして「研究成果」を据え、それをもって議論を完結するのならば、その結論は現行の医学分野と何

ら変わらない結論が導かれることになる。なるほど体育学の「全体像」の解明としてはデカルトにおける「学問の樹」の論理に忠実な議論を展開したということはできる。しかし「体育学の全体像」をこのように著したところで、これをもって体育学の学問としての独自性の解明とはならない。それならば、「学問の樹」を通じて体育学の独自性を明らかにするためにはどのような論点を付加することによって議論が完遂されるのであろうか。

確認しておきたいのは、デカルトが「学問の樹」の終着点として定めた「道徳」の実質である。「学問の樹」が表明された『哲学原理』よりも後の著作である『情念論』第三部において明示されるように、「高邁の徳」を体現した人間の完成においてデカルトは「道徳」の完成を見る。このことを違った角度から述べるならば、デカルト研究の碩学である山田弘明が指摘するように、「学問の樹」に象徴されるデカルト哲学の体系とは「人間研究の体系」として捉えられることを示すものである。なぜなら「学問の樹」の終着点に「道徳」が位置し、なおかつ「高邁の徳」に向かって学問が「形而上学」から演繹的に延び行くならば、諸学は畢竟「高邁の徳」の実現に向かって発展しているとも考えられるからである。そしてデカルトによるこの知見は「学問の樹」を用いて「体育学の全体像および独自性の解明」を目指す本研究に重要な示唆を与える。というのは、体育学は単に医学およびそれに隣接する諸分野のように疾病を有する人間の治療および看護にのみ専心するわけではない。むしろ競技スポーツおよび身体動作の分析からもうかがえるように、「人間の身体運動の可能性を構想し、その実現を試みる学問」といった性格が浮き彫りとなる。本研究の成果論文によれば、「身体運動する人間の成す可能性を構想し、その実現を試みる学問」として体育学の独自性が位置付けられる。この知見において体育学は医学との差異化が図られる。なぜなら、体育学は単なる傷病者の治癒にのみその研究成果を還元するばかりではなく、「身体運動する人間の成す可能性を構想し、その実現を試みる」という観点において学問としての独自性を明示することができるからである。

（5）研究成果の総括と拓かれる展望

以上の本研究の成果論文の結果により、体育学の全体像および独自性が解明される。改めてまとめるならば、次の通りである。体育学の全体像は一本の樹木に譬えることができる。研究対象の観点から検討するならば、その「根」は「人間」、「幹」は「身体運動」であって、体育学における研究対象の「根幹」は「身体運動する人間」である。その「幹」から伸びる「枝」は体育学に属する諸専門領域であり、その枝に実る「果実」が体育学から生まれる「研究成果」である。

他方、体育学の独自性は「身体運動する人間の成す可能性を構想し，その実現を試みる学問」として位置づけられる。以上が本研究の最終回答であるとともに、この結論によって次の二つの問いが新たに拓かれることとなる。第一に、「体育」概念の再定義であり、第二に学問としての体育学を支える「体育学者」の実質である。なぜなら、これまで「教育」の意味を前提として成立した体育学の内部に「教育」を議論枠組みの前提としない諸学が含まれる以上、「身体教育」の縮約語ではない新たなる「体育」概念の再考が求められるからである。併せて、新たな定義の与えられることとなる「体育」を考究する学者としての「体育学者」の実質について、諸研究者による議論の必要性ならびに重要性が浮上するからである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　1 件）

1. 林　洋輔　体育学の全体像および独自性の解明に向けた試論：ルネ・デカルトにおける「学問の樹」を手がかりとして、体育学研究、査読有、第 60 巻第 1 号、2015 年、頁数未定（2015 年 6 月掲載予定）

〔学会発表〕（計　　1 件）

1. 林　洋輔　体育学の全体像および独自性の解明、日本体育学会第 64 回大会、2013 年 8 月 28 日、立命館大学びわこ・くさつキャンパス（滋賀県）

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
林　洋輔(Hayashi Yosuke)
　国士舘大学体育学部付属体育研究所　特別研究員

　研究者番号：60645555

(2)研究分担者
(　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

　研究者番号：